

高大連携事業・HALCC 活動成果報告会

報告の様子は「道東テレビ」の
YouTube チャンネル
で配信しています。

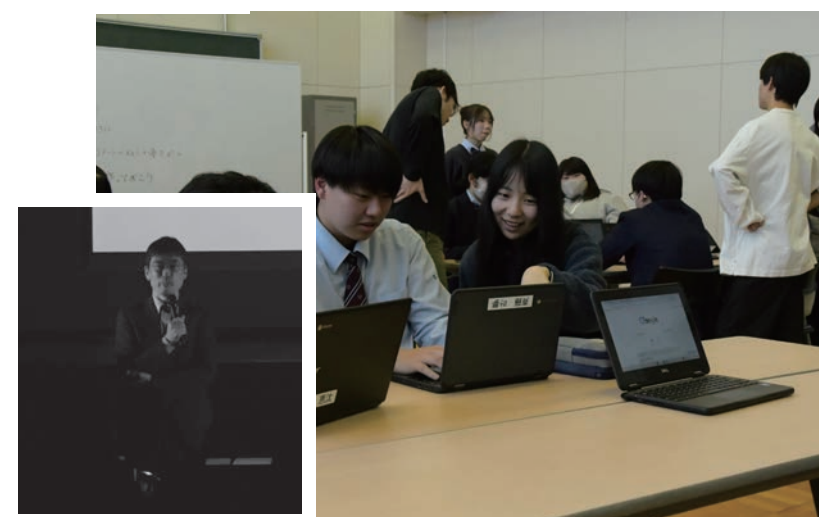


津別高校独自のカリキュラムである「つべつ学」。2年生が受けている「つべつ学II」では、北海道大学の課外活動団体 HALCC の力を借りながら「理想の津別町」をテーマに1年間探究してきた。12月13日には、津別高校 体育館で活動成果報告会が行われ、18名の生徒が町長や町民へ向けて自分たちの提言を発表。さまざまなアイデアが出され、まちの活性化へとつながるヒントで溢れていた。

大学生が高校生をサポートしながら
一緒に取り組んだ



▲活動成果報告会で高校生が
自分のアイデアを町長や町民
へ向けて発表した



成果報告会では、HALCC から今年度実施した高大連携事業について、年間カリキュラムやこれまでの取り組みの成果が報告されました。また、HALCC による町に向けた独自の政策提言も行われ、学生ならではの視点から、町の将来を見据えた考えが示されました。さらに、現在進行するまちなか再生事業にあわせ、施設看板や道案内看板の刷新を見据えた町内看板デザインの最終成果報告が行われました。報告では、1年間を通して高校生や町民と実施してきたワークショップの成果として、完成した最終デザインが発表されました。このほか、北大祭でのクマヤキ販売について、昨年を300個以上も上回る販売数となったことが報告されるとともに、HALCC 独自の地域情報誌製作に向けたクラウドファンディング事業の進捗についても紹介されました。

その後、高校生18名一人ひとりの提言を聴いた北海道大学公共政策大学院の今井太志教授は、「自分の考えを口に出して伝えることはとても大切。高校生が大人に対して自分たちの希望を示すことに大きな意味がある」と講評しました。



楽しく
健康維持と

荒川 くるみ さん

町内清掃

「楽しく健康維持と町内清掃」をテーマに、まちづくりの提案に1年間取り組んできた荒川くるみさん（津別高校2年生）。ボランティアサークル「ひまわり」に所属し、日頃から地域活動に関わる中で、町内清掃と健康づくりを結び付けた取り組みができたのかと考えるようになりました。現在、町内では春から夏にかけて清掃活動が行われていますが、秋には実施されていないことに荒川さんは着目しまし

た。秋は落ち葉が多く、景観の変化も大きい時期である一方、町全体で清掃を行う機会が少ないことから、「きれいな町を維持するためにも、秋の町内清掃があってもいいのでは」と課題を感じたといいます。そこで荒川さんが提案したのが、秋の町内清掃の新設です。ボランティアサークル「ひまわり」が主体となり、清掃をしながら町を歩くことで、自然と体を動かすことができ、健康維持にもつながる運動を兼ねた清掃活動として、幅広い世代が気軽に参加できる形を目指しました。さらに、落ち葉をただ集めるだけでなく、各地域ごとに落ち葉を使った「落ち葉アート」を制作し、フォトスポットとして活用するアイデアも提案。観光名所ではない場所にあえて設置することで、町民だけが知る穴場スポットのような楽しみ方ができるのではと考えました。

またつべつ学については「津別高校ならではの楽しい授業。後輩にもぜひ体験してほしい」と話し、学びを次につなげたいという思いも語ってくれました。

高校生が思い描く津別町の未来

「スポーツで人を増やす」をテーマに、まちの活性化について1年間取り組んできた中島瑛太さん（津別高校2年生）。北見市出身で、バドミントン部に所属し、これまでスポーツに親しんできました。現在、津別高校2年生は18人と少人数で、そのうち北見から通学している生徒は8人、美幌から通う生徒も1人います。中島さんが着目したのは、スポーツをきっかけに町外から人を呼び込める可能性があります。津別町には新しくなったトレーニングセンターや豊かな自然があり、これらを生かしたイベントを増やすことで交流人口の増加につながると考えました。

具体的には、トレーニングセンターを活用した球技大会や、津別中学校を会場とした町民運動会の開催を提案。大人と子どもが一緒に参加することで、多世代交流や自然なコミュニケーションが生まれることを期待しています。また、チミケツプ湖から津別までを下

る川下りイベントでは、津別産木材を使用したパドルを活用し、キャンプと組み合わせた滞在型イベントとして町の魅力を発信したいと話します。さらに、空き家を活用したサバイバルゲームの開催も提案しました。

また、つべつ学については「人数は少ないけれど、津別高校に通う中で新しい発見があつて楽しい」と笑顔で話してくれました。



スポーツで

中島 瑛太 さん

人を増やす